

西の湖で肥育した親貝を放流した試験区周辺でのセタシジミ資源状況

井戸本純一・草野充・磯田能年（（公財）滋賀県水産振興協会）

1. 目的

西の湖に垂下して肥育した親貝を放流した琵琶湖の試験漁場におけるセタシジミの資源状況を調査した。

2. 方法

琵琶湖東岸（彦根市松原町地先）のシジミ漁場内（水深約 5m）に設けた 30m 四方の試験区（親貝保護区画）に西の湖で肥育した親貝を 2015 年 5 月 19 日に 213kg、2016 年 5 月 12 日に 233kg、2017 年 5 月 9 日に 53kg 放流した。2017 年 3 月 23 日および 2018 年 3 月 27 日に調査用定量桁網（採取幅 8cm、袋網の目開き 10mm）を用いて採集調査を実施した。調査では試験区を中心としてその外側を放射状にそれぞれ 200m をめどに直線的な曳網を行い、GPS の記録から有効な距離を算定した。また、同漁場内で月 1 回実施している水深別モニタリング調査から直近の採集結果を同様に処理した。

3. 結果

各測線上における 1 m²あたりの採集個体数を漁獲制限がかかる殻長 18mm で色分けして図 1 に示した。試験区周辺の密度は、全方位の平均では 2017 年の 4.63 個/m²に対して 2018 年は 3.68 個/m²と減少した。方位別にみると、北東から西までの北西側で平均 5.14 個/m²から 3.45 個/m²へ、南西から東までの南東側で平均 4.12 個/m²から 3.91 個/m²へと試験区の沖合側で減少幅が大きかった。

漁獲サイズ(大型貝)に対する小型貝の比率(小型/大型)は、全方位の平均では 2017 年の 4.6 に対して 2018 年は 6.7 と上昇し、南東側では平均 4.0 から 3.9 へとやや低下したのに対して、北東側では平均 5.3 から 9.5 へと大幅に上昇した。

水深別モニタリングの定線上では、5m で密度が 6.64 個/m²から 2.04 個/m²へと減少したのに対して、10m では 5.25 個/m²から 11.72 個/m²へと大幅に増加した。

2017 年 10 月 22 日から 23 日にかけての台風 21 号の接近以降、水深 10m 線上では風化した貝殻が大量に混入するようになったことなどから、当該漁場は広範囲にわたって大きく攪乱されたとみられ、試験区周辺のセタシジミも沖合に移動したことがうかがわれた。

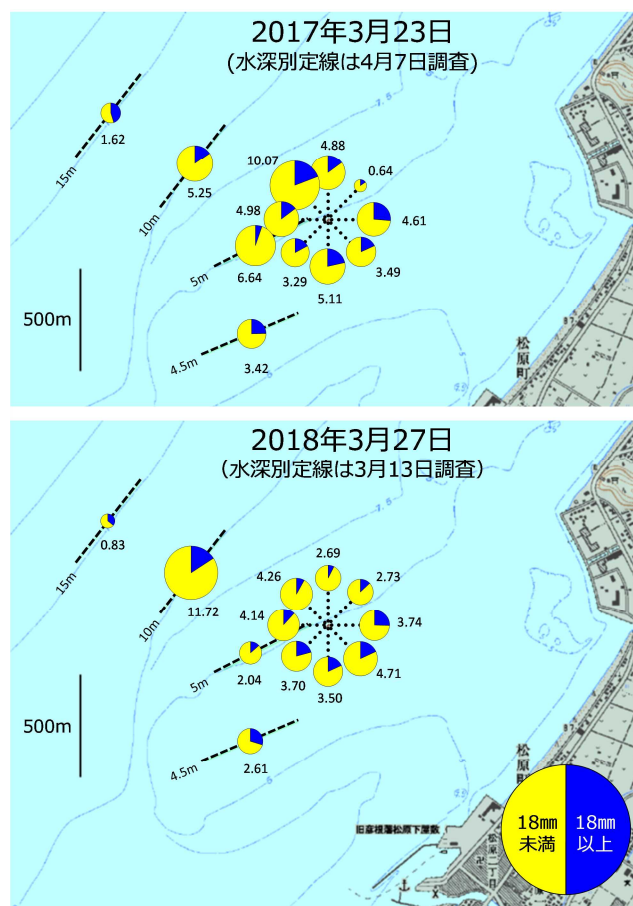


図 1 松原試験区周辺の測線（点線）および水深別モニタリング定線（破線）上におけるセタシジミの密度と殻長別内訳. 円グラフの面積と数字は 1 m²あたりの採集個体数を示す.

本研究は平成 28 年度二枚貝資源緊急増殖対策事業（水産庁）を実施する（公財）滋賀県水産振興協会と共同で行った。